（第三種郵便物認可）

マイウエイ my way

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　19

本格的な学生生活

日本に来た私を驚かせた慣習や出会いは沢山あったが、その中でも大きなカルチャーショックとなったのは日本語の難しさであった。高等学校で必修科目として三つの外国語を履修していたので、言葉の勉強にはかなりの自信を持っていたが、ヨーロッパの言語に特有の語彙・構造との共通点が全く見当たらず、結局ゼロからのスタートになった。

忘れがたい充実感 良き思い出

南山大学管弦楽団、学内演奏会

しかし、（これだというきっかけはなかったと思うが）日本へ来て一年目に私はタバコを止めて、漠然とした健康志向からジョギングを始めた（ジョギングコースは日本語学校があった鎌倉の十二所から建長寺まで続いた山道であった）。今思えばこれは、次の試練のための体力作りであったかもしれない。というのも、私は1972年の2月に鎌倉を後にして、いきなり南山大学で聖書学の集中講義を受けることになったからである。勿論全部日本語で。

その年の4月に3年生として当時の神学科（現在はキリスト教学科）に編入して、日本での本格的な学生生活を始めた。授業は司祭養成の専門科目ばかりで、全てキャンパスの東側にある神言会修道院の中で行われたので、他の大学生との主な接点は管弦楽団であった。私は部員ではなかったが、演奏会に向けてのパート練習やリハーサルに参加して、1972年の秋から3年間、六つの演奏会で第1バイオリンのセクションに加わって、当時指揮者をつとめてくださった清田健一先生の下で楽しく活動していた。

アメリカの心理学者ミハイ・チクセントミハイによると、我々が真の幸せを体験できる時は、一つのことに専念して、そのフローに乗って自分のことを忘れる時であるという。時間を忘れて練習に励み、友達と一緒に一つの曲をつくり上げ、そして本番で皆と一緒になって、その曲の流れに乗って自分のことを忘れてしまうという体験から得た充実感は、今でも良い思い出となっている。